

再刊の辞

ご無沙汰しました。お久しぶりです。いや、「どっこい、おいらは生きている」などと、照れ隠しにふざけてみせたくなるほど、前号が刊行されてから間があいてしまいました。我々の力不足の致すところで、何ともお恥ずかしい限りですし、ご支援の方々にはただ申し訳なく思うのみです。

『エイコス』第二号が刊行されたのは1980年ですから、早くもまる7年が経過してしまいました。と言ってもただ無為に年月を重ねていたわけではなく、我々の17世紀仏演劇研究会は、相変らず例会を毎月2回、隔週土曜日に続けていましたし、今も続けています。第二号の後記にもあるように、1630年～50年代の劇作品を、フランス国立図書館からのマイクロ・フィルムなどを利用して読み続けているのです。

その歩みが遅々としていることも確かですが、読了した作品すべてが論ずるに足るものでないこともありましたし、軽々に論じられない問題点が浮かび上がってきたこともありました。また途中で、会員仲間が長期間留学するということもありました。

要するに遅延理由は我々の不勉強、力不足にほかなりません。そのためにご迷惑をおかけした方々、特に見守ってくださっていた諸先生には改めて深くお詫びしたいと思います。とりわけ会員の一人戸口民也氏は、ヴェルラン・ル・コントについての第三号分の原稿を早くから寄せられていたのに、やむなく他に寄稿されることになってしまいました。同氏には心からお詫びしなければなりません。

我々の研究会の究極の目的は、出発の時とあまり変わっておりません。フランス古典悲劇生成の秘密を理論家の言からだけでなく、実作から、あるいは当時の演劇状況から探ることです。

例会でとりあげる作品は各会員個人の関心の赴くところによるので様々になりますが、17世紀中葉までの作品が多いのです。今回はその中から世紀前半のRotrouの喜劇、後半のThomas Corneilleの悲劇、機械仕掛けの芝居数作についての研究論文を載せ、また世紀中葉に没した劇詩人Tristan l'Hermiteの自伝小説の極く一部の翻訳を掲載しました。

さらに今回から巻末に、これまで読了した劇作品の梗概集の一部を載せていくことにしました。せめて梗概だけでも集めて記録にとどめて、のちの研究のよすがにもしたいと考えましたし、こうしてまとめておけば論文中で梗概を書く手間も省けると考えたのです。ご関心をお持ちの方々にも、少しはお役に立つのではないかとも思いました。これは今後も毎号掲載していく予定にしております。

我々の未熟、力不足はなお歴然としていますが、新しく加わった若い研究者ともども、今後とも研鑽を続けていく所存ですので、大方のご批判、ご叱正、ご指導をお願いする次第です。

伊藤 洋